

# 福岡県立大学人間社会学部における コンピュータリテラシー教育の効果（2012年）

石 崎 龍 二

**要旨** 福岡県立大学人間社会学部新入生の「情報処理の基礎と演習」の受講前後での主要アプリケーションソフトの操作スキルの習得状況について質問紙調査を2010, 2011年度に引き続いて行った。2012年度の間社会学部新入生の主要アプリケーションソフトの操作の高等学校での学習率は、「ワープロソフトWord」89.7%、「表計算ソフトExcel」88.9%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」79.4%、「インターネットを使った情報検索」88.9%といずれも高かったものの、「情報処理の基礎と演習」の受講前での各アプリケーションソフトの操作スキルについては、「十分できる」又は「少しできる」と回答した比率が「ワープロソフトWord」68.2%、「表計算ソフトExcel」47.1%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」51.6%、「インターネットを使った情報検索」88.5%とばらつきが見られた。

「情報処理の基礎と演習」の受講後に主要アプリケーションソフトの操作スキルの向上について調べた結果、操作スキルが「大きく向上した」又は「やや向上した」比率が「ワープロソフトWord」100.0%、「表計算ソフトExcel」99.2%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」98.4%、「インターネットを使った情報検索」92.9%となり、いずれも高い教育効果があったことがわかった。主要アプリケーションソフトの各操作スキルのチェック項目を整備し、「情報処理の基礎と演習」の受講前後での変化について詳細な検討を行った。

この他に、パソコンの所有率とその利用やインターネットの利用状況について「情報処理の基礎と演習」の受講前後での変化や学内の情報処理教室1の利用状況等についても調査を行った。

**キーワード** 情報基礎教育、コンピュータスキル、コンピュータリテラシー

## 1 はじめに

学習指導要領の改訂により、2003年度から、高等学校の普通科において教科「情報」が必修化され、2006年度から教科「情報」を履修した学生が大学に入学している。大学入学時までの

情報に関する教育が年々充実してきている。また、中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008年12月24日）では、汎用的技能（知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）の1つとして、情報リテラシーが挙げられている。したがって、現在、大学で行っ

ているコンピュータリテラシー教育の内容の点検が必要になっている。しかし、どのような見直しが必要なのか、その具体的な内容については、学生が入学時の段階で、どの程度「情報」に関する知識やコンピュータスキルを身につけているか、そしてコンピュータリテラシー教育の教育効果を具体的に検証する必要がある。

2008、2009年度に福岡県立大学人間社会学部の新入生に行った調査では、「情報処理の基礎と演習」受講後に、入学時での高等学校での教科「情報」の履修状況とコンピュータ操作スキル習熟度を調査した。しかし、入学時でのコンピュータスキルの習得状況を調べていなかった。そこで、2010、2011年度では、「情報処理の基礎と演習」受講前後での主要アプリケーションソフトの操作スキルの習熟度の向上について考えるために、本学人間社会学部の入学生に対して、入学時（4月）に、高等学校での教科「情報」の履修状況、コンピュータスキルの習得状況、パソコンの所有率と利用状況等について調査し、「情報処理の基礎と演習」の受講後（7月）に主要アプリケーションソフトの操作スキルの習熟度について調査を行い、「情報処理の基礎と演習」の教育効果について考察を行った。今回の2012年度では、2010、2011年度に引き続き、質問紙調査の質問項目や選択肢をさらに整備して、「情報処理の基礎と演習」の受講前後にコンピュータリテラシーに関する調査を実施した。この調査結果をもとに、福岡県立大学人間社会学部新入生に対するコンピュータリテラシー教育の教育効果について考察したい。

## 2 調査方法

### 調査対象

福岡県立大学人間社会学部で開講されている「情報処理の基礎と演習」（1年次前期、必修）の受講者（3クラス）

### 調査方法

「情報処理の基礎と演習」の授業時に、質問紙を学生に配布し、回答は無記名で実施し、その場で回収した。

### 調査時期

調査は2回実施した。1回目は、「情報処理の基礎と演習」の初回の授業開始時（2012年4月12日（1クラス）、4月13日（1クラス）、4月16日（1クラス））、2回目は、「情報処理の基礎と演習」の最終回の授業終了時（2012年7月26日（1クラス）、7月27日（1クラス）、7月30日（1クラス））に実施した。

### 調査項目

受講前の調査の調査項目は、所属に関するもの（2項目）、高等学校での教科「情報」の履修状況に関するもの（6項目）、パソコンの利用状況に関するもの（10項目）、ファイル管理やPCのハードウェアの基礎知識に関するもの（6項目）、「ワープロソフトWord」の学習内容に関するもの（22項目）、「表計算ソフトExcel」の学習内容に関するもの（22項目）、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の学習内容に関するもの（15項目）、「インターネットを使った情報検索」の学習内容に関するもの（15項目）、自由記述（1項目）の全99項目である（2011年度に比べ13項目を増やした）。

受講後の調査の調査項目は、所属に関するもの（2項目）、高等学校での教科「情報」の履修状況に関するもの（6項目）、パソコンの利用状況に関するもの（11項目）、ファイル管理やPCのハードウェアの基礎知識に関するもの（6項目）、「情報処理の基礎と演習」での「ワープロソフトWord」の学習内容に関するもの（26項目）、「情報処理の基礎と演習」での「表計算ソフトExcel」の学習内容に関するもの（26項目）、「情報処理の基礎と演習」での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の学習内容に関するもの（19項目）、「情報処理の基礎と演習」での「インターネットを使った情報検索」の学習内容に関するもの（19項目）、「情報処理の基礎と演習」での「操作スキルの向上に役立つ分野」（1項目）、「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容の充実度（1項目）、「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容の難易度（1項目）、「ワープロソフトWord」の演習時間（1項目）、「表計算ソフトExcel」の演習時間（1項目）、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の演習時間（1項目）、「インターネットを使った情報検索」の演習時間（1項目）、自由記述（1項目）の全123項目である（2011年度に比べ14項目増やした）。

### 回答者の内訳

学科毎の調査対象者の内訳は表1、表2の通りである。「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後の各学科の回答数はほぼ等しい。

## 3 調査結果

### 3.1 高等学校での教科「情報」の履修状況

高等学校での教科「情報」については、

表1 受講前の調査の回答者の学科毎の内訳

学科	回答数(人)	比率(%)
公共社会学科	50	31.8
社会福祉学科	54	34.4
人間形成学科	53	33.8
合計	157	100.0

表2 受講後の調査の回答者の学科毎の内訳

学科	回答数(人)	比率(%)
公共社会学科	39	31.0
社会福祉学科	46	36.5
人間形成学科	41	32.5
合計	126	100.0

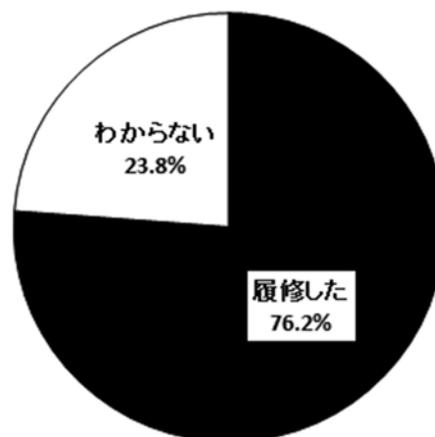


図1 高等学校での「情報」の履修（N=126）

76.2%が「情報A」「情報B」「情報C」のどれを履修したかを覚えており、23.8%は、どれを履修したのかを覚えていない（図1参照）。また、履修した教科「情報」の科目については、「情報A」が72.9%、「情報B」が16.7%、「情報C」が13.5%であった（図2参照）。受講生の多くが「情報A」を履修している。

教科「情報」の履修率は、2008年度、2009年度、2010年度で、94%、95%、95.7%であり、2011年度、2012年度では64.4%、76.2%と低い。

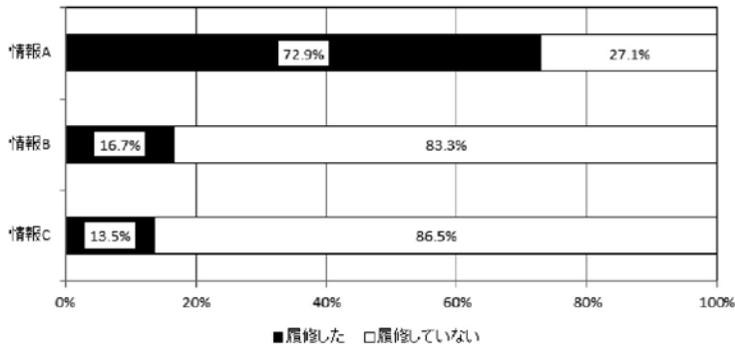


図2 高等学校での履修した教科「情報」の科目 (N=96) (MA)

この理由は、2011年度から、回答の選択肢に「わからない」という項目を追加したことによるものと考えられる。このことは、高等学校で「情報A」「情報B」「情報C」のどれを履修したのかを忘れてしまうくらい、受講生の教科「情報」への関心の低さを表しているのではないだろうか。

文部科学省の高等学校学習指導要領の「第10節 情報」によると、「情報A」が、コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して、情報を適切に収集・処理・発信するための基礎的な知識と技能の習得、「情報B」がコン

ピュータにおける情報の表し方や処理の仕組みの理解とコンピュータを効果的に活用するための科学的な考え方や方法の習得、「情報C」が、情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性の理解とコンピュータを効果的に活用する能力を養うとなっており、本学人間社会学部が文科系学部であることから、「情報A」を履修している学生の比率が高いことは自然なことだと考えられる。

次に、本学人間社会学部のコンピュータリテラシー教育で取り上げているアプリケーションソフトのソフト別の高等学校での学習状況を図

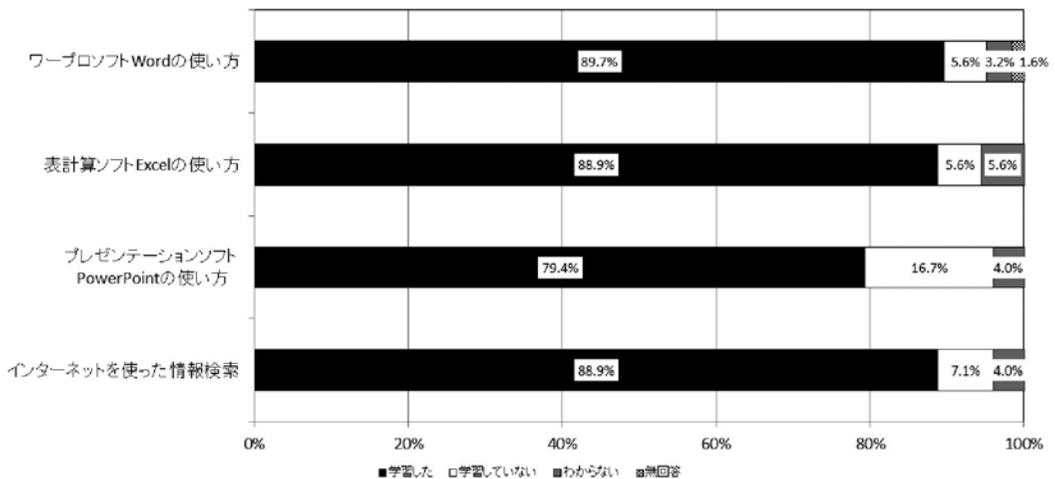


図3 高等学校でのアプリケーションソフトの学習状況 (N=126)

3に示す。

「ワープロソフトWord」の学習率が89.7%、「表計算ソフトExcel」の学習率が88.9%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の学習率が79.4%、「インターネットを使った情報検索」の学習率が88.9%と、全ての項目について高い学習率を示している。PowerPointの学習率が、他のソフトの使い方の学習率に比べると低い。

「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」「インターネットを使った情報検索」の学習率の過去のデータと比べると、2008年度調査では、それぞれ96%、91%、86%、89%、2009年度調査では、それぞれ92%、88%、77%、85%、2010年度調査では、それぞれ80.4%、82.2%、73.0%、80.4%、2011年度調査では、それぞれ77.8%、83.3%、63.9%、77.8%であった。「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」の学習率が2008、2009年度の調査では約9割だったのに比べて、2010、2011年度の調査では約1割減って約8割になっているが、2012年度で約9割となっている。但し、2008、2009、2012年度の調査は、高等学校での学習率を「情報処理の基礎と演習」の受講後の7月に行った結果であり、2010、2011年度の調査では、「情報処理の基礎と演習」の受講前の4月の時点での結果であったため、受講生が「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」「インターネットを使った情報検索」などのアプリケーション名や用語の意味を理解できなかったために、学習率が下がってしまった可能性は否定できない。

次節では、本学で開講している「情報処理の基礎と演習」で取り上げるアプリケーションソ

フトの操作スキルが、受講前後で、どのように変化したのかについての調査結果を報告する。

### 3.2 受講前と受講後のアプリケーションソフトの操作スキル

本学人間社会学部では、コンピュータリテラシー教育として、1年生を対象として前期に「情報処理の基礎と演習」（必修科目）を開講している。学習内容は、主に「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」「インターネットを使った情報検索」の操作スキルの習得である。いずれも2010のバージョンを利用している。これらの4つのアプリケーションソフトについて、受講前と受講後の各スキルの習得状況について考察する。

#### ① ワープロソフトWord

ワープロソフトは、今では大学でのレポートや論文作成において必要不可欠なソフトである。「情報処理の基礎と演習」受講者は、高等学校で「ワープロソフトWord」の使い方を89.7%が学習しているが（図3参照）、受講前は「ワープロソフトWord」の操作を31.8%が「あまりできない」又は「全くできない」と回答している。受講後では、「あまりできない」又は「全くできない」の回答は、4.0%と低くなっている（表3参照）。以上の結果から、大学での「ワープロソフトWord」のリテラシー教育は不要であるとは言い難い。

「情報処理の基礎と演習」での「ワープロソフトWord」のリテラシー教育についての受講者の受講後の調査結果を次に示す。

「情報処理の基礎と演習」の「ワープロソフトWord」の学習内容の難易度については、受講前に、89.7%の受講生がWordを学習したと

表3 受講前後での「ワープロソフトWord」の操作スキル

	受講前			受講後		
	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
十分できる	24	15.3	15.3	24	19.0	19.0
少しできる	83	52.9	68.2	97	77.0	96.0
あまりできない	45	28.7	96.8	5	4.0	100.0
全くできない	5	3.2	100.0	0	0.0	100.0
合計	157	100.0		126	100.0	

回答しているのに対して、「難しかった」又は「やや難しかった」と回答した比率が34.1%と高く、学習内容はどちらかといえば、やや難しかったようである。(表4参照)。

「ワープロソフトWord」の授業のスピードについては、「適切だった」と回答した比率が73.0%と比較的高い(表5参照)。「やや速かった」の回答率19.0%が「やや遅かった」の回答率4.8%よりも高く、授業の進度はどちらかといえば、速かったようである。

受講後に「ワープロソフトWord」の操作スキルが向上したかどうかについては、「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が100.0%であり、「大きく向上した」と回答した比率も50.0%と高い(表6参照)。

それでは、具体的にどのような操作スキルが向上したのだろうか。次に、「ワープロソフトWord」の各操作スキルについて「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後の回答結果を図4に示す。

表4 「情報処理の基礎と演習」での「ワープロソフトWord」の学習内容の難易度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
難しかった	7	5.6	5.6
やや難しかった	36	28.6	34.1
適切だった	76	60.3	94.4
やや簡単だった	5	4.0	98.4
簡単すぎた	2	1.6	100.0
合計	126	100.0	

表5 「情報処理の基礎と演習」での「ワープロソフトWord」の授業の進度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
速すぎた	4	3.2	3.2
やや速かった	24	19.0	22.2
適切だった	92	73.0	95.2
やや遅かった	6	4.8	100.0
遅すぎた	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

表6 「情報処理の基礎と演習」による「ワープロソフトWord」の操作スキルの向上

	回答数（人）	比率（%）	累積比率（%）
大きく向上した	63	50.0	50.0
やや向上した	63	50.0	100.0
変わらない	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

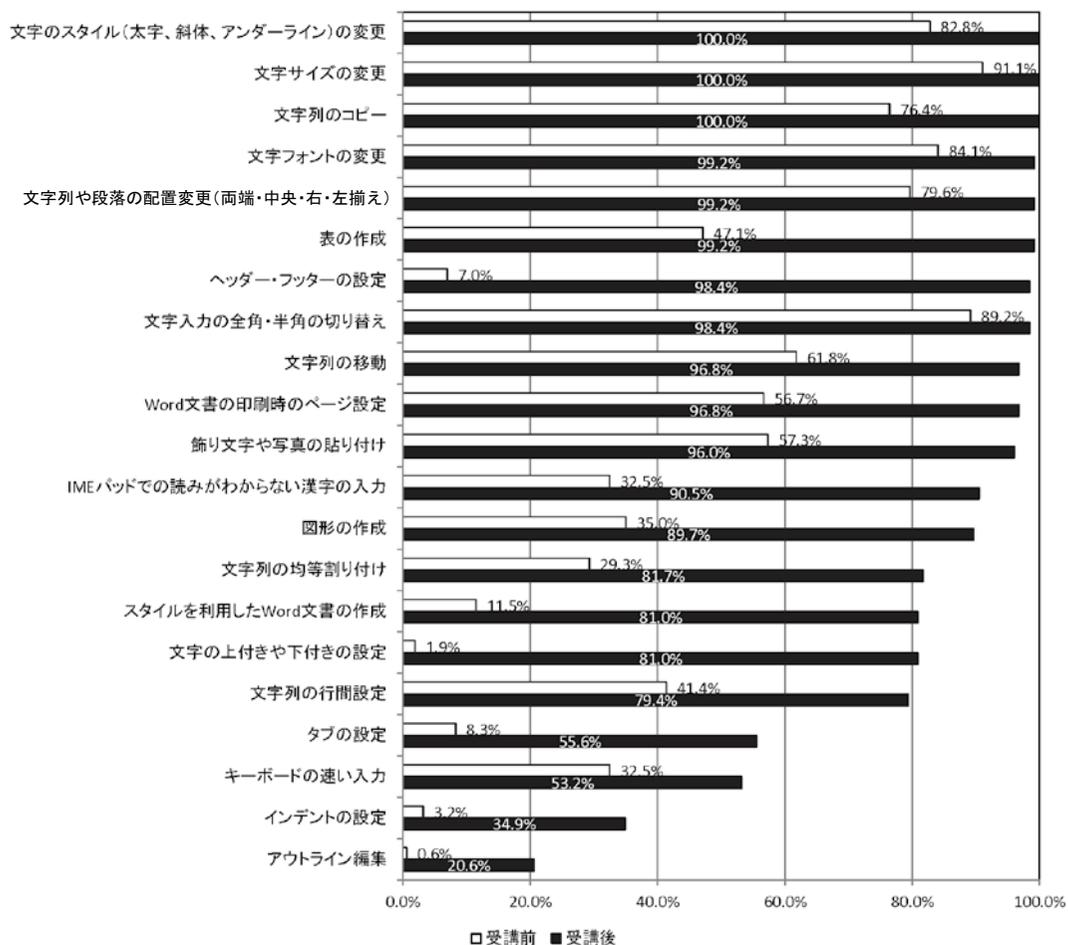


図4 受講前（N=157）と受講後（N=126）の「ワープロソフトWord」の項目別操作スキル

「文字入力の全角・半角の切り替え」「文字サイズ・フォント・スタイルの変更」「文字列のコピー」「文字列や段落の配置変更」など、Wordでの文字入力、基本的な文字入力と編集操作のスキルについては受講前に75%以上が

「できる」と回答している。一方、「キーボードの速い入力」「読みがわからない漢字の入力」など他の項目については、受講前に「できる」と回答した比率が低い。受講後は、「キーボードの速い入力」「タブの設定」「インデントの

設定」「アウトライン編集」「文字列の行間設定」以外は、80%以上が「できる」と回答している（図4参照）。図4の結果から、「ワープロソフトWord」の操作スキルが受講前に比べて大きく向上したことがわかる。「スタイルを利用したWord文書作成」「タブの設定」「インデントの設定」「アウトライン編集」といった項目が「できない」と回答した比率が高かったことは、文書の体裁を整える操作スキルの習得が不十分であることを意味している。受講後でも「キーボードの速い入力」については、「できる」と回答した比率が2008年度47%、2009年度48.2%、2010年度では43.8%と低かったが、2011年度59.0%、2012年度では53.2%が「できる」と回答している。最近の新生は、数年前に比べて、キーボードが速く打てるようになっていていると感じている。

以上の結果から、受講生の入学時での「ワープロソフトWord」の操作スキルは十分であったとは言えず、「情報処理の基礎と演習」での「ワープロソフトWord」のリテラシー教育が効果的であったと推察される。

## ② 表計算ソフトExcel

本学人間社会学部では、さまざまな調査データの統計処理をパソコンで行うスキルが必要である。この点で表計算ソフトの操作スキルの習

得は必須である。「情報処理の基礎と演習」受講者は、高等学校で「表計算ソフトExcel」の使い方を88.9%が学習している（図3参照）が、受講前では「表計算ソフトExcel」の操作を、52.9%が「あまりできない」又は「全くできない」と回答している。受講後では、「あまりできない」又は「全くできない」の回答は、11.1%と低くなっている（表7参照）。このことから、本学人間社会学部での「表計算ソフトExcel」のリテラシー教育の必要性は高いと考えられる。

「情報処理の基礎と演習」での「表計算ソフトExcel」のリテラシー教育についての受講者の受講後の調査結果を次に示す。

「情報処理の基礎と演習」の「表計算ソフトExcel」の学習内容の難易度については、「難しかった」又は「やや難しかった」と回答した比率が46.8%と高い（表8参照）。

「表計算ソフトExcel」の授業の進捗についても、「速すぎた」又は「やや速かった」と回答した比率が27.8%とやや高い（表9参照）。

「表計算ソフトExcel」については、学習内容の難易度が高く、演習の進行がやや速いと感じた受講生が多い結果が出たが、「表計算ソフトExcel」の操作スキルは受講後にどの程度向上したのだろうか。表10にその結果を示す。受講後に「大きく向上した」又は「やや向上した」

表7 受講前後での「表計算ソフトExcel」の操作スキル

	受講前			受講後		
	回答数(人)	比率(%)	累積比率(%)	回答数(人)	比率(%)	累積比率(%)
十分できる	12	7.6	7.6	9	7.1	7.1
少しできる	62	39.5	47.1	103	81.7	88.9
あまりできない	59	37.6	84.7	14	11.1	100.0
全くできない	24	15.3	100.0	0	0.0	100.0
合計	157	100.0		126	100.0	

表8 「情報処理の基礎と演習」での「表計算ソフトExcel」の学習内容の難易度

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
難しかった	16	12.7	12.7
やや難しかった	43	34.1	46.8
適切だった	62	49.2	96.0
やや簡単だった	5	4.0	100.0
簡単すぎた	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

表9 「情報処理の基礎と演習」での「表計算ソフトExcel」の授業の進度

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
速すぎた	5	4.0	4.0
やや速かった	30	23.8	27.8
適切だった	87	69.0	96.8
やや遅かった	4	3.2	100.0
遅すぎた	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

と回答した比率が99.2%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も53.2%と高い。

それでは、具体的にどのような操作スキルが向上したのだろうか。次に、「表計算ソフトExcel」の各操作スキルについて「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後の回答結果を図5に示す。

受講前に「オートSUM関数を使った合計、平均の計算」「罫線を引く」「グラフにタイトルの設定」「グラフの作成」ができると回答した比率が47.1%、44.6%、40.8%、40.1%と他の項目と比べると高い。表の作成、オートSUM関数

の活用、グラフ作成は、表計算ソフトExcelの基本操作である。これらの比率の低さから高等学校でのExcelの操作スキルの習得が十分ではないと推察される。また、「セルに絶対参照を使った数式の作成」「セルに相対参照を使った数式の作成」が「できる」と回答した比率が、それぞれ2.5%、7.6%と極めて低い。Excelで計算式を使って集計する上で、計算式の入力、絶対参照の設定は必要不可欠である「オートフィルタ機能を使ったデータの抽出」「データの並べ替え」が「できる」と回答した比率も、それぞれ1.9%、15.3%と低く、Excelのデータベース

表10 「情報処理の基礎と演習」を受講後の「表計算ソフトExcel」の操作スキルの向上

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
大きく向上した	67	53.2	53.2
やや向上した	58	46.0	99.2
変わらない	1	0.8	100.0
合計	126	100.0	

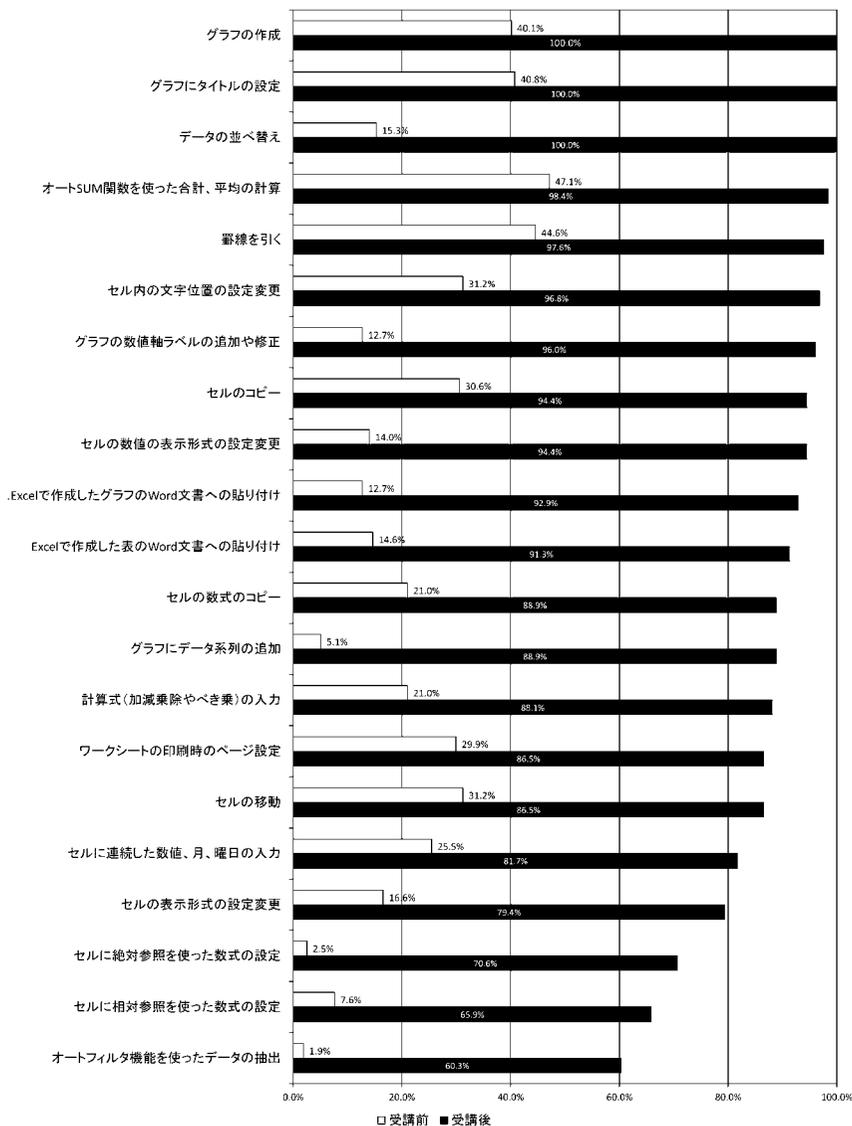


図5 受講前 (N=157) と受講後 (N=126) の「表計算ソフトExcel」の項目別操作スキル

機能の操作スキルも習得できていないことが推察される。

図5の結果から、「情報処理の基礎と演習」の受講後に「表計算ソフトExcel」の各操作スキルが大きく向上したことがわかる。受講後は、「オートフィルタ機能を使ったデータの抽出」「セルに相対参照を使った数式の作成」「セ

ルに絶対参照を使った数式の作成」「セルの表示形式の設定変更」以外の項目は、80%以上が「できる」と回答している。但し、受講後の「できない」と回答した項目を見ると、セルに自前で数式を組み立てて計算するスキルが十分に習得できていないと考えられる。

以上の結果から、受講生の入学時での「表計

算ソフトExcel」の操作スキルについても十分であったとは言えず、「情報処理の基礎と演習」での「表計算ソフトExcel」のリテラシー教育が非常に効果的であったことがわかる。

### ③ プレゼンテーションソフトPowerPoint

プレゼンテーションソフトは、大学や就職後の様々な発表の場面で必要不可欠なソフトとなってきた。 「情報処理の基礎と演習」受講者は、高等学校での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の使い方の学習率が79.4%と他のソフトウェアに比べて低く（図3参照）、受講前に「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作を「あまりできない」又は「全くできない」と回答した比率が48.4%と高い（表11参照）。以上の結果から、本学人間社会学部での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」のリテラシー教育の必要性は高いと考えられる。

「情報処理の基礎と演習」での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」のリテラシー教育についての受講者の受講後の調査結果を次に示す。

「情報処理の基礎と演習」の「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の学習内容の難易度については、「適切だった」と回答した比率が73.8%と高かった（表12参照）。

「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の授業の進度についても、80.2%が「適切」と回答している（表13参照）。

受講後に「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキルが向上したかどうかについては、「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が98.4%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も44.4%と高い（表14参照）。

それでは、具体的にどのような操作スキルが

表11 受講前後での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキル

	受講前			受講後		
	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
十分できる	15	9.6	9.6	14	11.1	11.1
少しできる	66	42.0	51.6	102	81.0	92.1
あまりできない	47	29.9	81.5	10	7.9	100.0
全くできない	29	18.5	100.0	0	0.0	100.0
合計	157	100.0		126	100.0	

表12 「情報処理の基礎と演習」での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の学習内容の難易度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
難しかった	7	5.6	5.6
やや難しかった	19	15.1	20.6
適切だった	93	73.8	94.4
やや簡単だった	7	5.6	100.0
簡単すぎた	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

表13 「情報処理の基礎と演習」での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の授業の進度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
速すぎた	2	1.6	1.6
やや速かった	17	13.5	15.1
適切だった	101	80.2	95.2
やや遅かった	6	4.8	100.0
遅すぎた	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

表14 「情報処理の基礎と演習」を受講後の「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキルの向上

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
大きく向上した	56	44.4	44.4
やや向上した	68	54.0	98.4
変わらない	2	1.6	100.0
合計	126	100.0	

向上したのだろうか。次に、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の各操作スキルについて「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後の回答結果を図6に示す。

受講前に「スライドのデザイン変更」「スライド(テキストベース)の作成」「スライドに飾り文字や写真の貼り付け」「スライドのオブジェクトにアニメーション効果の設定」など基本的なスライド作成の操作については「できる」と回答した比率が55%を超えている。一方、「スライドに組織図の作成」「スライドにグラフの作成」「スライドに表の作成」が「できる」と回答した比率が、それぞれ17.2%、33.1%、36.3%と低い。これは、テキストベースでのスライド作成はできるが、表やグラフを使ったスライド作成まではできないことを示している。また、「発表者用ノートの作成」「配布資料の印刷」が「できる」と回答した比率も、それぞれ9.6%、26.8%と低い。これは、発表時に前もって聴衆に配布する資料を準備するというスキル

が低いことを示している。

受講後は、「発表者用ノートの作成」「スライドの行頭文字の変更」以外の項目においては90%以上が「できる」と回答している。図6の結果から、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキルが受講前に比べて大きく向上したことがわかる。

#### ④ インターネットを使った情報検索

インターネットを使った情報検索の操作スキルの習得は、レポートや論文を作成する上で役立つ文献や統計データなどの検索において重要である。「情報処理の基礎と演習」受講者は、高等学校で「インターネットを使った情報検索」の使い方を88.9%が学習している(図3参照)。また、受講前に「インターネットを使った情報検索」の操作を88.5%が「十分できる」又は「少しできる」と回答している(表15参照)。以上の結果から、大学での「インターネットを使った情報検索」のリテラシー教育の必要性は低いと予想される。

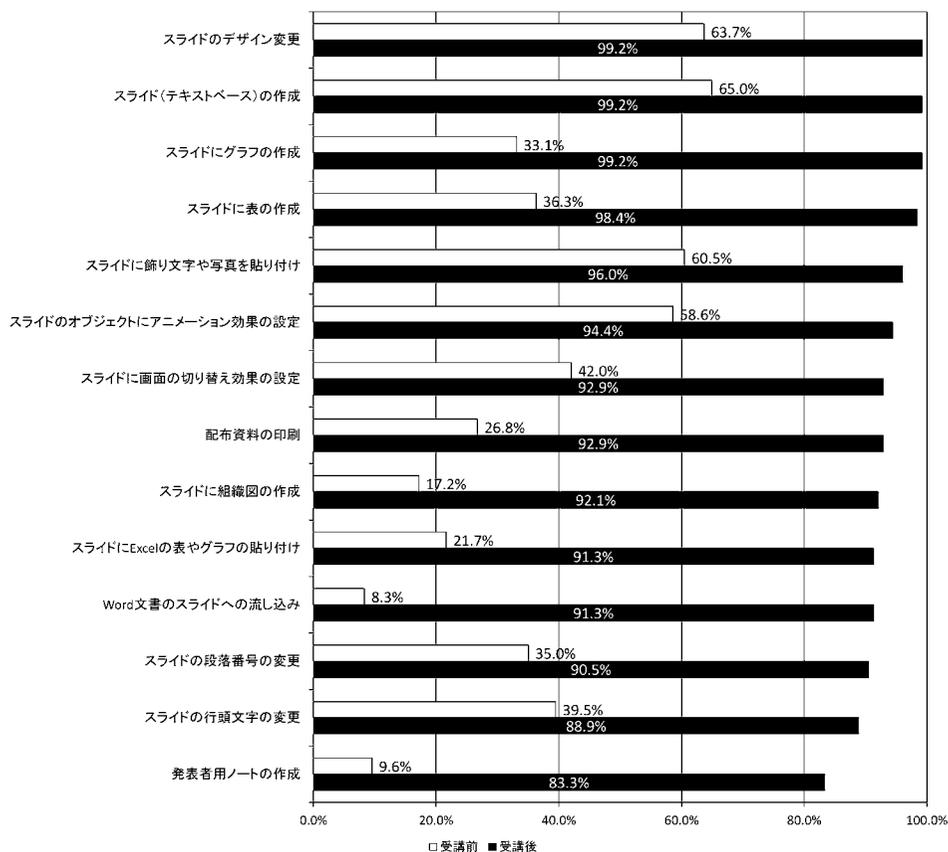


図6 受講前（N=157）と受講後（N=126）の「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の項目別操作スキル

「情報処理の基礎と演習」での「インターネットを使った情報検索」のリテラシー教育についての受講者の受講後の調査結果を次に示す。

「情報処理の基礎と演習」の「インターネットを使った情報検索」の学習内容の難易度につ

いては、「適切だった」と回答した比率が76.2%と高い（表16参照）。

「インターネットを使った情報検索」の授業の進捗についても、「適切だった」と回答した比率が80.2%と高い（表17参照）。

表15 受講前後での「インターネットを使った情報検索」の操作スキル

	受講前			受講後		
	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
十分できる	80	51.0	51.0	18	14.3%	14.3%
少しできる	59	37.6	88.5	98	77.8%	92.1%
全くできない	17	10.8	99.4	10	7.9%	100.0%
あまりできない	1	0.6	100.0	0	0.0%	100.0%
合計	157	100.0		126	100.0%	

受講後に「インターネットを使った情報検索」の操作スキルが向上したかどうかについては、「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が92.9%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も23.8%と低くはない(表18参照)。

それでは、具体的にどのような操作スキルが向上したのだろうか。次に、「インターネットを使った情報検索」「電子メールの活用」の項目別操作スキル、用語の説明について「情報処

理の基礎と演習」の受講前と受講後の回答結果を図7に示す。

受講前に「電子メールの送受信」「インターネットの検索エンジンを使ったカテゴリ検索」「インターネットの検索エンジンを使ったキーワード検索」については、「できる」と回答した率が、それぞれ64.3%、60.5%、59.2%と高い。一方、「SMTPサーバの説明」「POPサーバの説明」「サーバとクライアントの名称の区別」「CCとBCCの違い」「ドメイン名の説明」

表16 「情報処理の基礎と演習」での「インターネットを使った情報検索」の学習内容の難易度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
難しかった	7	5.6	5.6
やや難しかった	8	6.3	11.9
適切だった	96	76.2	88.1
やや簡単だった	8	6.3	94.4
簡単すぎた	6	4.8	99.2
無回答	1	0.8	100.0
合計	126	100.0	

表17 「情報処理の基礎と演習」での「インターネットを使った情報検索」の授業の進度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
速すぎた	3	2.4	2.4
やや速かった	10	7.9	10.3
適切だった	101	80.2	90.5
やや遅かった	8	6.3	96.8
遅すぎた	3	2.4	99.2
合計	126	100.0	

表18 「情報処理の基礎と演習」を受講後の「インターネットを使った情報検索」の操作スキル

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
大きく向上した	30	23.8	23.8
やや向上した	87	69.0	92.9
変わらない	9	7.1	99.2
無回答	1	0.8	100.0
合計	126	100.0	

「Webブラウザの説明」などの用語の説明が「できる」と回答した比率が、それぞれ0.0%、0.0%、5.7%、17.8%、14.0%、17.8%と低い。受講前に「インターネットを使った情報検索」「電子メールの活用」の操作スキルはある程度身に付いているが、用語の意味についての理解は不十分であることが推察される。受講後は、用語の説明である「SMTPサーバの説明」「POPサーバの説明」「サーバとクライアントの名称の区別」「CCとBCCの違い」「ドメイン名の説明」「Web

ブラウザの説明」「検索エンジンの説明」「URLの説明」と「電子メールのアドレス帳の活用」以外の「インターネットを使った情報検索」「電子メールの活用」の項目別操作スキルについては80%以上が「できる」と回答している。これは、受講者が「インターネットを使った情報検索」「電子メールの活用」はできるが、使っているスキルに関する用語の意味についての理解は不十分であることを意味していると考えられる。

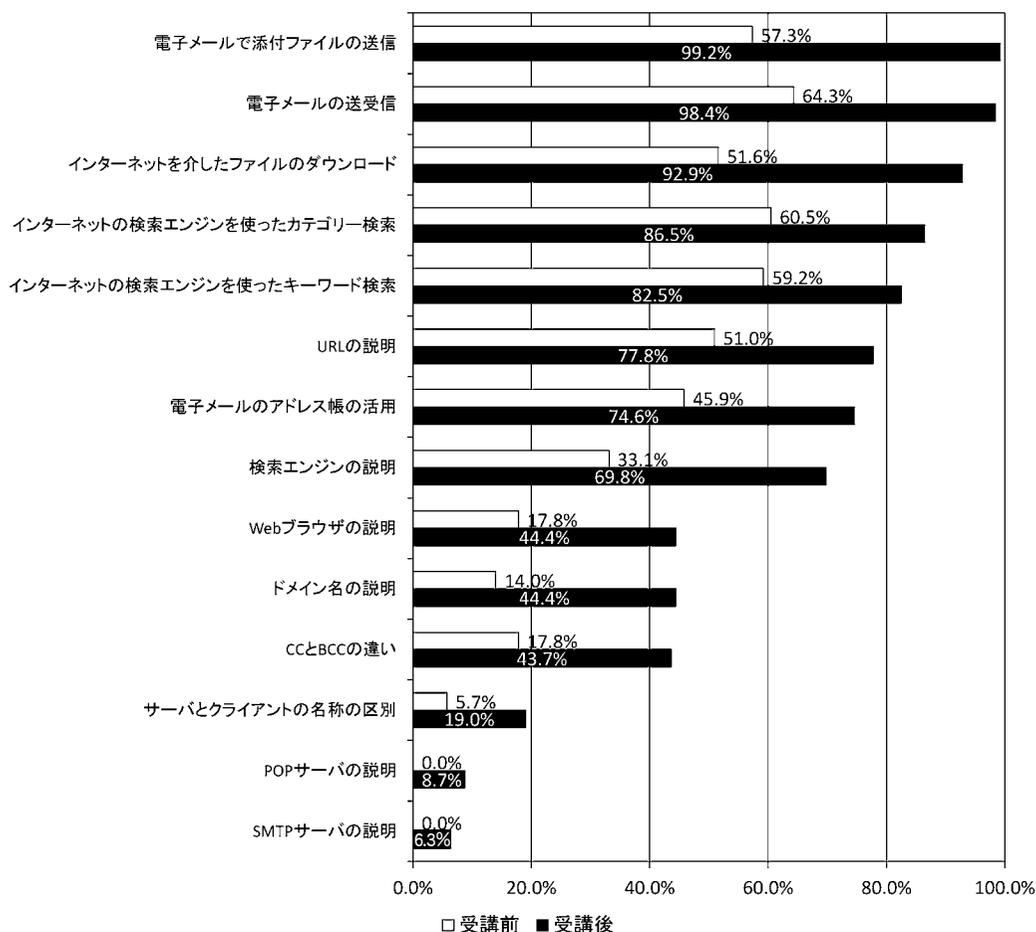


図7 受講前（N=157）と受講後（N=126）の「インターネットを使った情報検索」の項目別操作スキル

#### 4 「情報処理の基礎と演習」の学習内容の 難易度と演習時間

前節では、「情報処理の基礎と演習」の各アプリケーションソフトのコンピュータリテラシー教育の効果について考察した。ここで、「情報処理の基礎と演習」全般に関する質問項目の回答結果について考察する。「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容の充実度については、89.7%が「満足」又は「やや満足」と回答している。「やや不満」又は「不満」の回答は0.0%である（表19参照）。

「情報処理の基礎と演習」の内容の難易度についての要望は、「今のままでよい」の回答率が88.9%であることから、難易度については適切であることがわかる（表20参照）。

「ワープロソフトWord」の演習時間については、「今のままでよい」の回答率が89.7%であることから、「ワープロソフトWord」の演習時間については適切であることがわかる（表

21参照）。

「表計算ソフトExcel」の演習時間については、「今のままでよい」の回答率が78.6%であるが、「時間を増やして欲しい」の回答率が18.3%であることから、「表計算ソフトExcel」の演習時間については時間を増やす検討が必要である（表22参照）。

「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の演習時間については、「今のままでよい」の回答率が84.9%であることから、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の演習時間については適切であることがわかる（表23参照）。

「インターネットを使った情報検索」の演習時間については、「今のままでよい」の回答率が78.6%であるが、他の3つのアプリケーションソフトの操作スキルの学習に比べると「時間を減らしてもよい」の回答率が17.5%と比較的高い（表24参照）。「インターネットを使った情報検索」の演習時間については時間を減らす検討が必要である。

表19 「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容の充実度

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
満足	62	49.2	49.2
やや満足	51	40.5	89.7
普通	13	10.3	100.0
やや不満	0	0.0	100.0
不満	0	0.0	100.0
合計	126	100.0	

表20 「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容の難易度についての要望

	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
もっと高度な内容にして欲しい	6	4.8	4.8
今のままでよい	112	88.9	93.7
もっと初歩的な内容にして欲しい	8	6.3	100.0
合計	126	100.0	

表21 「ワープロソフトWord」の演習時間についての要望

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
時間を増やして欲しい	9	7.1	7.1
今のままでよい	113	89.7	96.8
時間を減らしてよい	4	3.2	100.0
合計	126	100.0	

表22 「表計算ソフトExcel」の演習時間についての要望

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
時間を増やして欲しい	23	18.3	18.3
今のままでよい	99	78.6	96.8
時間を減らしてよい	4	3.2	100.0
合計	126	100.0	

「情報処理の基礎と演習」を受講して、操作スキルの向上という点で勉強になった操作スキルは、「表計算ソフトExcel」94.4%、「ワープロソフトWord」88.1%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」78.6%、「インターネットを使った情報検索」20.6%となり、「インターネットを使った情報検索」の演習に関しては、他の操作スキルと比べるとそれほど操作スキルの向上につながっていないことがわかる（図8参照）。

アプリケーションソフトを活用するためには、ファイル管理に関する操作スキルやパソコンのハードウェアに関する基礎知識は必須である。「情報処理の基礎と演習」受講後に、各操作スキルが向上はしているものの、「PCにおけるCPUの役割」「PCにおけるメモリの役割」「PCにおけるOSの役割」「PCにおけるハードディスクの役割」などの基礎知識は、身につけていないことがわかる（図9参照）。

以上の結果から、「情報処理の基礎と演習」の

表23 「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の演習時間についての要望

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
時間を増やして欲しい	15	11.9	11.9
今のままでよい	107	84.9	96.8
時間を減らしてよい	4	3.2	100.0
合計	126	100.0	

表24 「インターネットを使った情報検索」の演習時間についての要望

	回答数（人）	比率（％）	累積比率（％）
時間を増やして欲しい	5	4.0	4.0
今のままでよい	99	78.6	82.5
時間を減らしてよい	22	17.5	100.0
合計	126	100.0	

コンピュータリテラシー教育については、一般的に教育効果は高いものの、「インターネットを使った情報検索」の演習については、受講生にとって、満足度が比較的低いことがわかった。

### 5 パソコンの所有率と利用状況

受講生のコンピュータスキルの向上を考え

る上で、大学での情報処理の演習の時だけではなく、自宅でのコンピュータの利用状況を知ること重要である。受講生のパソコンの所有率は、受講前が「専用パソコン」と「共用パソコン」を合わせると82.2%、受講後が100.0%となり、受講生の多くが入学時にパソコンを所有しており、1年次前期が終了する時期には全員が所有していることがわかる（表25参照）。特に

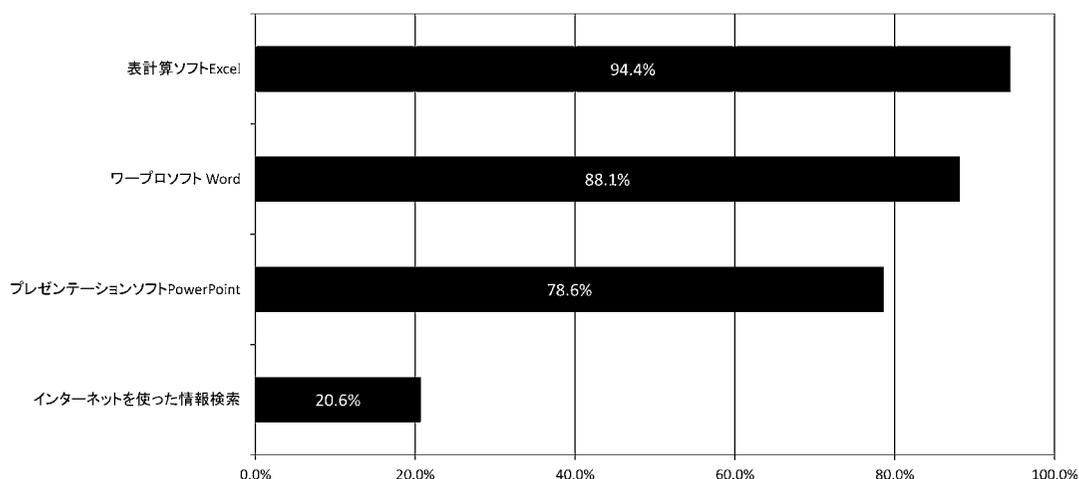


図8 操作スキルの向上という点で勉強になった操作スキル (N=126) (MA)

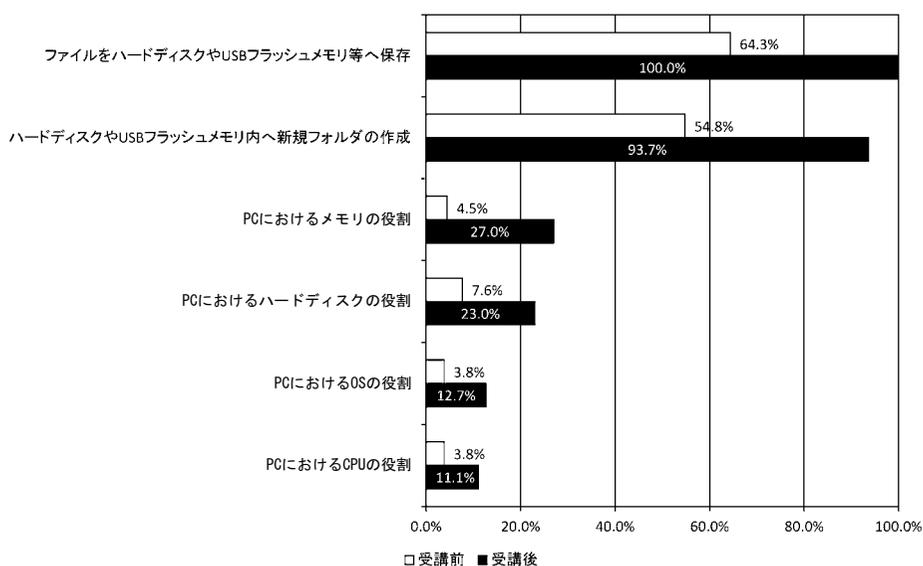


図9 受講前 (N=157) と受講後 (N=126) のファイル管理に関する操作スキル

専用パソコンの所有率が59.2%から84.9%に伸びている。1年次前期終了時のパソコン（「専用パソコン」or「共用パソコン」）の所有率は、2008年度91.1%、2009年度91.4%、2010年度91.9%、2011年度95.2%であり、パソコンの所有率は、今年度で初めて100.0%となった。

自宅、アパートで利用しているパソコンにインストールされているアプリケーションソフトの割合は、受講後に「ワープロソフト Word」98.4%、「表計算ソフト Excel」96.0%と殆どのパソコンにインストールされている。また「プ

レゼンテーションソフト PowerPoint」でさえ74.6%と高いことがわかった。

また、自宅・アパートからパソコンを使ったインターネットの利用については、受講前の62.4%から85.7%に伸び、1年次前期の終了時には85%以上の受講生が、自宅・アパートからパソコンを使ってインターネットにアクセスしていることがわかる（表26参照）。1年次前期終了時の自宅・アパートからパソコンを使ったインターネットの利用率は、2008年度70.9%、2009年度73.4%、2010年度78.8%、2011

表25 受講前（N=157）と受講後（N=128）の自宅・アパートに利用できるパソコン（専用パソコンor共用パソコン）の有無

	受講前		受講後	
	回答数（人）	比率（%）	回答数（人）	比率（%）
専用パソコン	93	59.2	107	84.9
共用パソコン	36	22.9	19	15.1
ない	28	17.8	0	0.0
合計	157	100.0	126	100.0

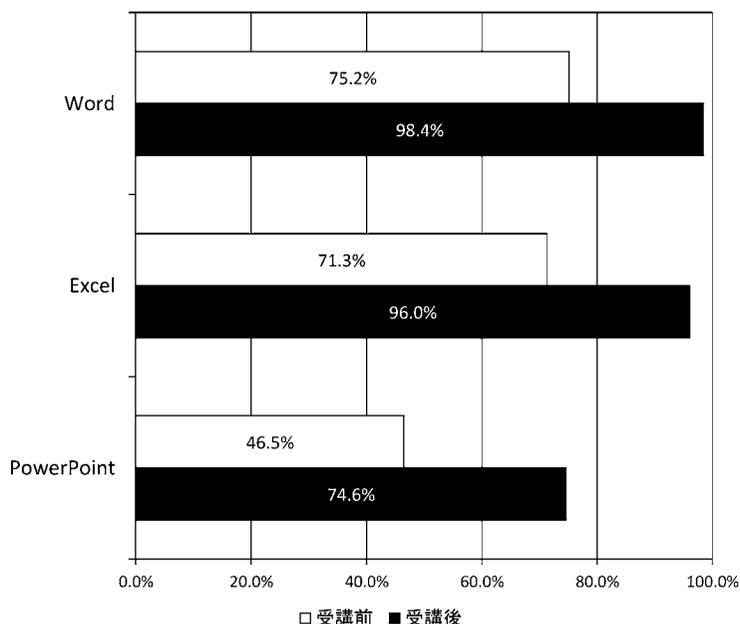


図10 自宅・アパートで利用するパソコンにインストールしているアプリケーションソフト

表26 受講前 (N=157) と受講後 (N=126) の自宅・アパートからパソコンを使ったインターネットの利用

	受講前		受講後	
	回答数 (人)	比率 (%)	回答数 (人)	比率 (%)
している	98	62.4	108	85.7
していない	58	36.9	18	14.3
無回答	1	0.6	0	0.0
合計	157	100.0	126	100.0

表27 受講前 (N=157) と受講後 (N=126) のパソコンの利用頻度 (1週間)

	受講前			受講後		
	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)	回答数 (人)	比率 (%)	累積比率 (%)
毎日	19	12.1	12.1	30	23.8	23.8
週に6日程度	1	0.6	12.7	8	6.3	30.2
週に5日程度	8	5.1	17.8	17	13.5	43.7
週に4日程度	7	4.5	22.3	12	9.5	53.2
週に3日程度	19	12.1	34.4	27	21.4	74.6
週に2日程度	17	10.8	45.2	19	15.1	89.7
週に1日程度	26	16.6	61.8	6	4.8	94.4
ほとんど利用しない	60	38.2	100.0	7	5.6	100.0
合計	157	100.0		126	100.0	

年度85.5%であり、この所有率は5年間の調査で徐々に高くなっている。

1週間あたりのパソコンの利用頻度を表27に示す。受講生は入学時には38.2%が、パソコンをほとんど利用しないと回答している。週に3日以上利用している比率は、受講前の34.4%から1年次前期の終了時には74.6%へと大きく伸びている。

1年次前期終了時での学内の情報処理教室1(平日開放)の利用状況については、74.6%が授業時間外に週に2日以上利用している(表28参照)。

パソコンを何に使っているのかという設問に関しては、受講前は、「ウェブサイトの閲覧」71.3%、「音楽ダウンロード・鑑賞」48.4%、

「DVD鑑賞」31.2%、「文書作成」31.2%、「ネットショッピング」26.1%、「電子メール」14.6%、「ブログ」12.1%の順であり、「ウェブサイトの閲覧」「音楽ダウンロード・鑑賞」に偏っていた(図11参照)。受講後は、「文書作成」が31.2%から87.3%、「発表資料作成」が5.1%から24.6%、「表計算」が1.3%から22.2%へと大きく伸びている(図11参照)。特に「文書作成」の伸びが目立つ。これは、高等学校では自宅学習などでワープロソフトや表計算ソフトを活用する機会は少なかったが、大学ではレポート作成などのためにワープロソフトや表計算ソフトを使う機会が増えたためではないかと考えられる。

以上のことから、2012年度入学生のパソコン

表28 1年次前期終了時の情報処理教室1の利用状況（授業時間外）

	回答数（人）	比率（%）	累積比率（%）
ほぼ毎日	9	7.1	7.1
週に4日	7	5.6	12.7
週に3日	47	37.3	50.0
週に2日	31	24.6	74.6
週に1日	28	22.2	96.8
ほとんど利用しない	4	3.2	100.0
合計	126	100.0	

の所有率や自宅からのインターネットの利用率やパソコンの利用目的が1年次前期の間に良い方向に変化していることがわかる。2010、2011年度の調査でも同様な傾向が見られる。

## 6 まとめ

本稿では、2010、2011年度に引き続き本学人間社会学部新生の「情報処理の基礎と演習」の受講前後での主要アプリケーションソフトの操作スキルの習得状況に関する質問紙調査を行い、コンピュータリテラシー教育の教育効果を検証した。

本学人間社会学部でコンピュータリテラシー教育として開講している「情報処理の基礎と演習」の主な学習内容である「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」「インターネットを使った情報検索」の操作の4項目について、受講前の各スキルの習熟状況を考察した。

2012年度の入学生のうち23.8%が高等学校で「情報A」「情報B」「情報C」のどれを履修したのか「わからない」と回答した。このことから、新生の教科「情報」への関心の低さを表していると推察される。

高等学校でのアプリケーションソフトの操

作の学習率は、「ワープロソフトWord」が89.7%、「表計算ソフトExcel」が88.9%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」が79.4%、「インターネットを使った情報検索」が88.9%と、全ての項目について高い学習率を示し、新生の多くが「情報処理の基礎と演習」で学ぶ主要アプリケーションの操作について、受講前に学習していた。

各アプリケーションソフトの操作スキルについて詳細に調べた結果、「ワープロソフトWord」の操作スキルについては、「情報処理の基礎と演習」の受講前は、「十分できる」又は「少しできる」と回答した比率が68.2%と高かったが、受講後に「ワープロソフトWord」の操作スキルが「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が100.0%であり、「大きく向上した」と回答した比率も50.0%と高かった。「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後での「ワープロソフトWord」の各操作スキルの習得状況の変化をみると、「文字入力の全角・半角の切り替え」「文字サイズ・フォント・スタイルの変更」「文字列のコピー」「文字列や段落の配置変更」など、「ワープロソフトWord」での基本的な文字入力と編集操作のスキルについては受講前に70%以上が「できる」と回答している一方で、「キーボードの速い入力」「タブ

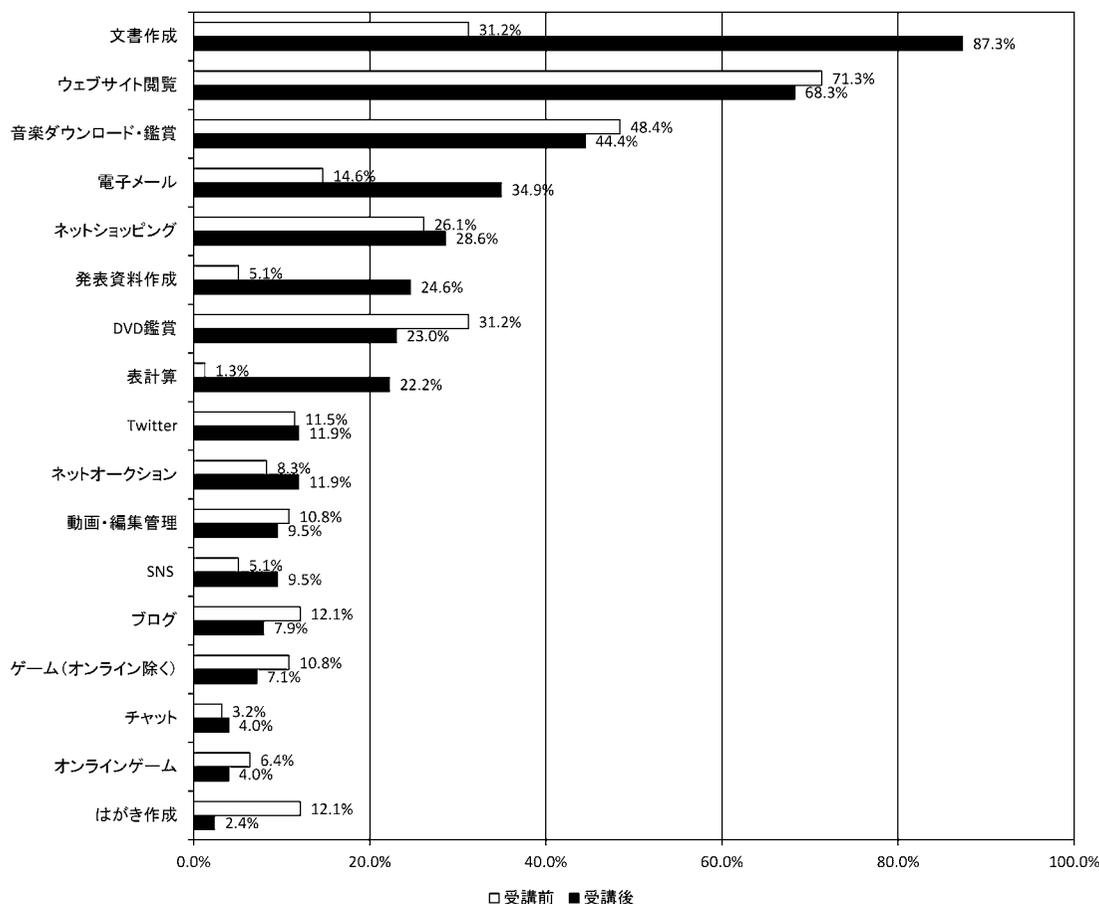


図11 受講前 (N=157) と受講後 (N=126) のパソコンの利用目的 (MA)

の設定」「インデントの設定」「アウトライン編集」「文字列の行間設定」などの項目については、受講後でも「できる」と回答した比率が低かった。このことは、文書の体裁を整える操作スキルの習得が不十分であったことを意味している。「キーボードの速い入力」については、受講後も「できる」と回答した比率が53.2%と低かったが、2008年度47%、2009年度48.2%、2010年度43.8%と比べると、2011年度59.0%に引き続き「できる」と回答した比率が高かった。

「表計算ソフトExcel」の操作スキルについては、「情報処理の基礎と演習」の受講前は、

15.3%が「全くできない」と回答していた。受講後に「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が99.2%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も53.2%と高かった。「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後での「表計算ソフトExcel」の各操作スキルの習得状況の変化をみると、受講前にExcelで計算式を使って集計する上で重要な「セルに絶対参照を使った数式の作成」「セルに相対参照を使った数式の作成」が「できる」と回答した比率が、それぞれ2.5%、7.6%と極めて低かった。またExcelのデータベース機能の操作スキルで

ある「オートフィルタ機能を使ったデータの抽出」「データの並べ替え」が「できる」と回答した比率が、それぞれ1.9%、15.3%と低かった。受講後は、「オートフィルタ機能を使ったデータの抽出」「セルに相対参照を使った数式の作成」「セルに絶対参照を使った数式の作成」「セルの表示形式の設定変更」以外の項目は、80%以上が「できる」と回答しており、「表計算ソフトExcel」の操作スキルが受講前に比べて大きく向上している。但し、受講後の「できない」と回答した項目から、セルに自前で数式を組み立てて計算するスキルの習得が不十分であることが推察される。

「プレゼンテーションソフトPowerPoint」については、受講前では「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作を18.5%が「全くできない」と回答していた。受講後は「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキルが「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が98.4%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も44.4%と高かった。「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後での「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の各操作スキルの習得状況の変化をみると、受講前に「スライドのデザイン変更」「スライド（テキストベース）の作成」「スライドに飾り文字や写真の貼り付け」「スライドのオブジェクトにアニメーション効果の設定」など基本的なスライド作成の操作については55%以上が「できる」と回答した。一方、「スライドに組織図の作成」「スライドにグラフの作成」「スライドに表の作成」が「できる」と回答した比率が、それぞれ17.2%、33.1%、36.3%と低かった。受講後は、「発表者用ノートの作成」「スライドの行頭文字の変更」以外の項目においては90%以上

が「できる」と回答している。「プレゼンテーションソフトPowerPoint」の操作スキルが受講前に比べて大きく向上している。

「インターネットを使った情報検索」については、受講前では「インターネットを使った情報検索」の操作を88.5%が「十分できる」又は「少しできる」と回答しており、「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」に比べるとその比率が高かった。しかし、受講後に「インターネットを使った情報検索」の操作スキルが向上したかどうかについては、「大きく向上した」又は「やや向上した」と回答した比率が92.9%と高く、「大きく向上した」と回答した比率も23.8%と低くはなかった。「情報処理の基礎と演習」の受講前と受講後での「インターネットを使った情報検索」の各操作スキルの習得状況の変化をみると、受講前に「電子メールの送受信」「インターネットの検索エンジンを使ったカテゴリ検索」「インターネットの検索エンジンを使ったキーワード検索」については、「できる」と回答した率がそれぞれ64.3%、60.5%、59.2%と高かったが、「SMTPサーバの説明」「POPサーバの説明」「サーバとクライアントの名称の区別」「CCとBCCの違い」「ドメイン名の説明」「Webブラウザの説明」など、用語の説明が「できる」と回答した比率が、それぞれ0.0%、0.0%、5.7%、17.8%、14.0%、17.8%と低かった。受講後は、用語の説明である「SMTPサーバの説明」「POPサーバの説明」「サーバとクライアントの名称の区別」「CCとBCCの違い」「ドメイン名の説明」「Webブラウザの説明」「検索エンジンの説明」「URLの説明」と「電子メールのアドレス帳の活用」以外の「インターネットを使った情報検索」「電

子メールの活用」の項目別操作スキルについては80%以上が「できる」と回答している。「インターネットを使った情報検索」「電子メールの活用」の操作スキルは身に付いたが、用語の意味についての理解は不十分であることが推察される。

「情報処理の基礎と演習」全般に関する質問項目の回答結果からは、「情報処理の基礎と演習」で学んだ内容について、89.7%が「満足」又は「やや満足」と回答している。「情報処理の基礎と演習」の内容の難易度についての要望は、「今のままでよい」の回答率が88.9%であった。各アプリケーションソフトの演習時間については、「ワープロソフトWord」が「今のままでよい」の回答率が89.7%、「表計算ソフトExcel」が「今のままでよい」の回答率が78.6%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」が「今のままでよい」の回答率が84.9%、「インターネットを使った情報検索」が「今のままでよい」の回答率が78.6%であった。しかし、「表計算ソフトExcel」の演習時間については、「時間を増やして欲しい」の回答率が18.3%であることから時間を増やす検討が、「インターネットを使った情報検索」の演習時間については、「時間を減らしてもよい」の回答率が17.5%であることから、時間を減らす検討が必要であることがわかった。「情報処理の基礎と演習」を受講して、操作スキルの向上という点で勉強になった演習は、「表計算ソフトExcel」94.4%、「ワープロソフトWord」88.1%、「プレゼンテーションソフトPowerPoint」78.6%、「インターネットを使った情報検索」20.6%となり、「インターネットを使った情報検索」の演習については、受講生にとってはそれほど操作スキルの向上につな

がっていないことがわかった。従って、「インターネットを使った情報検索」の演習内容については見直しが必要である。

受講生のパソコンの所有率は、受講前が「専用パソコン」と「共用パソコン」を合わせると82.2%、受講後が100.0%となり、受講生の多くが入学時にパソコンを所有しており、1年次前期が終了する時期には全員が所有している。特に専用パソコンの所有率が59.2%から84.9%に伸びている。自宅・アパートからパソコンを使ったインターネットの利用については、受講前の62.4%から85.7%に伸び、1年次前期の終了時には85%以上の受講生が、自宅・アパートからパソコンを使ってインターネットを利用している。パソコンの利用目的については、受講前は、「ウェブサイトの閲覧」「音楽ダウンロード・鑑賞」に利用目的が偏っていたが、受講後は、「文書作成」が31.2%から87.3%、「発表資料作成」が5.1%から24.6%、「表計算」が1.3%から22.2%に伸びている。このことは、高等学校では日常的にワープロソフトや表計算ソフト等を活用する機会は少なかったが、大学ではレポート作成などのためにワープロソフトや表計算ソフト等を活用する機会が増えたためではないかと考えられる。以上のことから、1年生のパソコンの利用状況が入学時から前期終了時までの短期間に非常に活発になったことが窺える。

2010年度から3年連続で、「ワープロソフトWord」「表計算ソフトExcel」「プレゼンテーションソフトPowerPoint」「インターネットを使った情報検索」の操作スキルについて入学時と「情報処理の基礎と演習」の受講後の変化について調査を行った。その結果、2010、2011年度と同様に情報リテラシーの教育効果が高いことがわかった。大学入学前でのコンピュータ

リテラシー教育が強化されている中で、コンピュータリテラシー教育が大学でも必要なのかという疑問があるが、以上の調査から本学人間社会学部では必要であると判断される。但し、高等学校でのコンピュータリテラシー教育は本学でのコンピュータリテラシー教育に良い影響をもたらしているのは間違いない。以前は、新入生へのコンピュータリテラシー教育において、タイピングの基礎の指導に相当な時間を費やされていた。

大学入学時までの情報に関する教育と大学でのコンピュータリテラシー教育とのつながりを考える上で、今後も高等学校での「情報」の履修状況とコンピュータ操作スキルの習熟度、「情報処理の基礎と演習」でのコンピュータリテラシー教育の教育効果について調査を継続して実施することが大切である。

## 参考文献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成11年3月告示，14年5月，15年4月，15年12月一部改正）第10節情報（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/011.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/011.htm)）
- 2) 学士課程教育の構築に向けて（答申）（平成20年12月24日）中央教育審議会。（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo0/toushin/1217067.htm)）
- 3) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキルとコンピュータリテラシー教育，福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 18，No. 1，pp.43-60（2009）。
- 4) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキルとコンピュータリテラシー教育（2009年），福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 18，No. 2，pp.121-141（2010）。
- 5) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキルとコンピュータリテラシー教育，平成22年度情報教育研究会講演論文集，pp.451-454（2010）。
- 6) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生の入学時のコンピュータスキル調査（2010年），福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 19，No. 2，pp.99-109（2011）。
- 7) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生のアプリケーションソフトの操作スキルとコンピュータリテラシー教育（2010年），福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 20，No.1，pp.71-88（2011）。
- 8) 石崎龍二：福岡県立大学人間社会学部新入生に対するコンピュータリテラシー教育の教育効果（2011年），福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 21，No.2，pp.41-63（2012）。
- 9) 野村卓志・原田茂治：高校新課程を経た学生に対する大学の情報リテラシー教育，静岡文化芸術大学研究紀要，Vol. 8，pp.1-4（2007）。
- 10) 横内滋里・片谷孝孝・鳥養映子・林英輔：情報基礎教育における入学前教育実績の影響：10年間の年次推移から，情報処理学会報告，コンピュータと教育研究会報告，Vol. 2004，No. 49，pp.41-48（2004）。
- 11) 田中哲也・久永明・神谷英二・四戸智昭・内田若希：福岡県立大学新入学生の学力実態を踏まえた導入教育及び全学共通教育に関する調査研究（第1報），福岡県立大学人間社会学部紀要，Vol. 16，No. 2，pp.69-75（2008）。
- 12) 日経BPソフトプレス（編集）・久野靖・佐藤義弘・辰己丈夫：これだけでわかる最新情報リテラシー——コンピュータ&ネットワーク技術の基本から情報活用のモラルまで，日経BPソフトプレス（2006）。
- 13) 松尾三郎：情報社会と人づくり—情報リテラシーへの提言，電子開発学園（1991）。
- 14) 廣渡栄寿・浅羽修丈：北九州市立大学文科系学部学生のタイピング練習の努力とその成果，平成20年度情報教育研究会講演論文集，pp.145-148（2008）。

- 15) 藤井美知子, 直野公美, 丹羽量久: 大学入学前情報教育の学習経験の5年間の変遷, 平成22年度情報教育研究会講演論文集, pp.259-262 (2010).